東京財団「日本人のちから」Vol.8　2004.5

海守と日本人のこころ

石原義剛
海の博物館館長

薄れつつある海への意識

いま日本列島を取り巻く海の自然環境の悪化は著しい。漁業においては沿岸漁業を含め生産量が最高時の半分に激減している。人々の紐帯である共同体を支えてきた海村の文化、祭りや木造船造船技術などが衰亡の寸前にある。海外物流の隆盛をよそに、離島や内海の物資運搬を含める国内の海上交通は船乗りとともに消滅の一歩前にある。

もっとも憂慮されるのは、そのような海の状況を多くの人々が正しく認識していないこと、そしてそれ以上に、多くの人々が無関心な事実である。すなわち海への関心がどんどん希薄化している。

日本列島人を〝海民〟という言葉で表した網野善彦氏が「最も顕著、かつ重大なのは、現実の生活がさまざまな面で海に大きく依存しているに拘わらず、日本人が自らを専ら『農業を主とする民族』と思い込み、自らの歴史と社会の中で海の役割について、ほとんど自覚してこなかった」（『海民と日本社会』）という歴史的な社会認識が一部に残っているのは確かだが、現代人にはもう「農業を主とする民族」という意識さえもつものも少なくなっているから、より問題は深刻である。

畏敬と感謝をもって海に対してきた

明治初年の日本列島人口はほぼ三千三百万人、漁業民や船乗り、製塩業者など直接海にかかわって暮らしをたてる人々が五百万人を下らなかったと推定できる。当時、さらに魚介類加工販売や木造船の船大工、鍛冶屋など周辺諸職に従事する人の数は多かった。わたしはそれら海に依存して暮らす人々は列島人の三分の一を占めていたと想像している。

さらに付け加えると、農業、林業と海との一体となった深い関係がある。江戸期など海からもたらされる魚肥藻肥なくては列島農業は成り立たなかった。海運業、漁業において船材や漁業資材として消費された木材は膨大であった。米も木綿も木材も大半が船で運ばれた。すなわち明治初年において、海に依存し、なんらかのかかわりから、「自覚」するしないは別として、海を意識してきた列島の人々だったのは間違いない。以降ゆっくりと工業化と都市化は進んだが、一九五〇年代初めまでは海は列島の人々に身近な影響力をもっていた。

太古の昔から、日本列島人が海と向かい合い、海との深い付き合いの中で暮らしてきたことは間違いない。自然なる海に対する意識の在り方は、海村の神仏の祀り、祭り、そして先祖を供養する姿に刻み込まれている。

山でも野でも八百万の神々を祀っているが、海民はとりわけ篤い。自然なる海の多様性、多面性を知り尽くして多くの神仏を祀ってきた。暴れ狂う海には、逆らうことなく生命の安全を願い、病魔や災厄をもたらす海には、退散を乞い願う。一転して、平穏な海、豊饒な海には、真心からなる感謝を捧げる。畏敬と感謝、それが人々の海の神へ全身で捧げる偽りのない気持ちであった。

海に、生き物の霊を見る

海民たちのさらに強い気持ちは生きとし生けるものの精霊への供養にある。生業のためとはいえ殺生してきた生き物たちへのやさしさ。海に呑まれていった者への供養。静かに海の彼岸へ去った者への供養。いまも海村の早い朝、波打ち際で海に向かって御供えし深く祈る姿を見る。

志摩半島にはまだ海女が千人もいて数千年のかわらぬ漁労をつづけているが、潜り初めの神事をしなければ漁期に入らない。それは豊漁と操業安全の祈願であり、海から授かる生き物への供養であり、さらに漁期間を可能な限り短くすることで、生き物を護り残していく配慮でもある。さまざまな取り過ぎない工夫、約束を重ねる海女たちには、今日風にいう資源保護を越えた、海の生き物たちへの意識があるように思える。

木造船の船大工はもう十年もすれば消えようとしているが、過去数千年にわたって、山で貰いうけた木の命を、海に再生する仕事をしてきた。木を切り倒した後、木霊（こだま）に祈りを捧げ、造船が完成すると船霊（ふなだま）を入れ込んで木の再生を祝う。この船に乗って漁師たちは、海に生き物を探し求める。ここには海限りではない、海と陸との生命系の連鎖がある。

海の脅威を克服する

列島人たちは久しい年月、海の抗し難い脅威に立ち向かい、多くは諦めてきたが、また多くの克服の努力も重ねてきた。

子どもたちの海との付き合いは〝船酔い〟と〝泳ぎ潜り〟からはじまる。決して止めることのできぬ波動、潮流、水深、その克服が子どもと海を近づける。人々はだれもが最初、船酔いと泳ぎ潜りに苦しみ格闘して、やっと海と折り合いをつけて海好きで親しい間柄になった。船酔いのあとで海の優しさを知り、泳ぎ潜りの経験から、海の生き物の豊かさと危険を知る。抗して勝てぬものを知り、勝てぬまでも恐れぬことを知る。その先に、冒険の心が育ち、冒険から未知への挑戦と創造が生まれる。

船と航海術、漁具と漁法は、長い年月と犠牲を払って、海の脅威を知り尽くした後に完成した他にない海独特の発明である。現代になって、パワーと防腐性と電子技術が加わって、能力が数倍になったが、それ以上の飛躍はない。そして残念ながら、伝統的な木造船や多様な漁具は経済性や効率で判断されて、作られることもなく消えようとしている。

海の意識を遠ざけるもの

現代は、台風と津浪の猛威を防ぐために巨大なコンクリート壁を列島中に巡らせ、海上交通を海から陸上や地下や空中に代えた。工業化社会は最新の科学と技術によって、それまで人々が恐れ、抗する術をもたなかった海の脅威を取り除き安全を確保した、と思った。魚や藻から作った肥料は石油や穀物からに代って、海からの必要がなくなった。ついに、海岸の砂浜での海水浴が、コンクリート・プールでの水泳に代えられ、プールで泳げても海で泳げぬ子どもたちを育てた。

漁業も工業化した。一網打尽に獲る科学技術とパワーによって、殺さずともよい魚介まで殺すようになった。数千年にわたって育んできた自然なる海、生き物に満ちた海との共存関係は、「作る漁業」という言葉が象徴する、人間の海の支配に帰した。どこにでもあった近隣漁村から町や農村への〝振り売り〟は姿を消し、産地生産方法ともに不明の魚介類が切り身の姿でスーパーで売られるようになった。すべてが、海の意識を遠ざけていった。

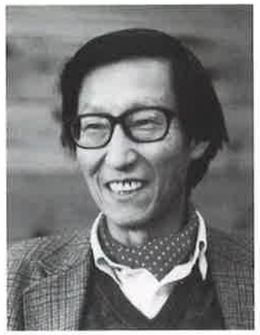
いま何ができるのか

日本列島人の抱いてきた海への意識はほんとうに消えてしまったのだろうか。厚いコンクリートの壁は荒々しい海神を忘れさせ、力の漁法は海神への感謝を薄れさせた。しかし、現代の列島人は一時、海神を科学や技術で征服したと思い込んだのが間違いだったと気づきだしたようだ。人間が傲慢に、力をもってして海を支配できるものでないことを知らねばならぬ時がきているようだ。

わたしの海の博物館では、海を実体験する数々のプログラムを子どもたちとともに実施している。木造和船の保存および技術の継承を願って最近、船大工に造ってもらった木造船の船漕ぎ体験は人気のプログラムの一つ。危ないから、船酔いするからと止める親にかかわらず子どもたちは喜んで参加する。

そして、すぐ海と船に馴染み上達する。その船で磯場に渡り潮だまりに生き物を喜々として追う。海岸に流れついた海藻や漂着物を拾って、感触や形に驚き、名を覚える。持ち帰って標本を作り、漂着物アートを創作する。子どもたちの身体に秘める海の本能、心の底の海意識を呼び覚ます。

子ども騙しだと叱責されても、海への意識を取り戻す術は、〝船酔い〟と〝泳ぎ潜り〟の克服、ほんものの海に触れることからはじめる以外にないと信じている。あとは海の神様たちを信じることだけ。



いしはら・よしかた　一九三七年生まれ。早稲田大学第一文学部を卒業後、名古屋のTV放送局に入社。六九年に退社し、海の博物館設立準備に携わる。七一年に同館が開館し、館長代理。のちに現職。博物館の活動として海を守る「SOS save our sea」運動のほか、木造和船の保存と船大工技術の継承に腐心している。

YOSHIKATA ISHIHARA